

天からの火、天からの風
——聖霊降臨

使徒言行録 2 : 1 - 13



司祭 ヨハネ 井田 泉

日本国際ギデオン協会京滋奈地区早天祈禱会

2015年5月30日
聖霊降臨後の土曜日

奈良基督教会にて

礼拝堂は今、赤い色を用いています。赤を用いるのは1年間でごくわずかで、イースターの直前、主イエスの受難を記念する1週間、それに教会の誕生を祝う聖霊降臨日が主なものです。

ちょうどこの前の日曜日が聖霊降臨日でした。現在の聖公会の約束事としては、聖霊降臨日の翌日の月曜日からは緑を用いることになっています。

けれどもわたしは二つの理由から、今日まで赤のままにしておきました。それは、教会を誕生させた聖霊降臨の出来事を、せめて1週間は「赤」を用いることをとおして大切に心にとめていたい。もうひとつは、ギデオンの今日の早天祈祷会を、聖霊降臨の赤で行いたいと思ったからです。

「そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」使徒言行録 2:3

赤は炎の色です。神の愛が燃えて、炎となって、祈る人々の群れに注がれた。ひとりひとりに注がれた。これが先ほど読まれた使徒言行録第2章の出来事です。

主イエスの復活から50日目、昇天から10日目の日曜日、弟子たちは一つになって集まっていました。心をつにして礼拝していたのです。そのとき突然、天から大きな音が聞こえてきました。

「突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた」使徒言行録 2:2

「音が天から聞こえ……」

教会を誕生させた聖霊降臨の出来事は、「天からの音」を共に聞く強烈な経験であったことがわかります。ではそれはどのような音だったのでしょうか。きっとこの上なく美しい音だったに違いありません。

「激しい風が吹いてくるような音」

ここをギリシア語原典で確かめてみると、「激しい息（風）を運ぶ音」と直訳できます。天からの音は、風をはらみ、息をもたらすものでした。

息とは息吹、神の命の息です。神が最初の人、アダムを創造されたとき、人としての形は立派に整ったものの、横たわったままで動きませんでした。神は人との対話・交流を望み、アダムが生きることを願われました。

そこで神は「その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」創世記 2:7。

復活のイエスは、ユダヤ人たちを恐れて家の戸に鍵をかけていた弟子たちのところにおいでになり、その真ん中に立って

「あなたがたに平和があるように」（ヨハネ 20:19、26）

と言われました。そして彼らに息を吹きかけて、

「聖霊を受けなさい」

と言われました（ヨハネ 20:22）。

聖霊降臨の日、天からの音は、神の命の息、復活のイエスの

息吹をもたらしました。天からの音は、それを祈っている人々の中に吹き込んで、人々を生かしたのです。

三つのことを心にとめたいと思います。

第一に、最初の祈りの群れに対して、またそのひとりひとりに対して神の愛が燃えて、その炎が注がれたように、今も神の愛の火が祈る群れに、またわたしたちひとりひとりに注がれています。

第二に、最初の祈りの群れは、天からの音を聞きました。わたしたちも天からの音、天からの声を聞きましょう。天からの音を、天からの声を聞いて、わたしたちは清められ、慰められ、励まされます。それなしに活動だけをすれば、わたしたちは枯渇してしまいます。

第三に、最初の祈りの群れが、神の息吹、復活の主の息吹を受けたように、わたしたちも神の息吹、復活の主の息吹を受けています。それを深く吸い込みましょう

神さま、あなたの愛の火を注ぎ、それをわたしたちのうちに宿らせてください。聖書を読むとき、聖書を携えるとき、聖書を配るとき、あなたの愛がわたしたちを励まし支えてくださいますように。わたしたちに天の音を聞かせて、わたしたちを慰め、清めてください。あなたの命の息を送ってください。ギデオンの働きを祝福してください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン